

## ぼくにもできる平和につながる道

千代田区立和泉小学校 5年

田中 颯人

ぼくが昭和館に行ったきっかけは、小学一年生の時に夏休みの自由研究で千代田区の戦争について考えたからです。なぜ千代田区の戦争について考えたのかというと、自宅の近くにある公園に大きなお墓みたいな石碑があって母に聞いたところ、「戦災殉難者慰霊碑」と教えてくれました。そして慰霊碑は戦争で亡くなってしまった人たちを慰めるために建てられたものと知りました。そこで千代田区の戦争について検索したところ、千代田区戦跡マップというのがあったので、そこを巡ることにしました。

まずは鎌倉橋欄干傷跡から千鳥ヶ淵墓苑に向かっている最中に昭和館の目の前を通りました。昭和館について母から戦争を考える展示がしてあるということを教えてもらいました。

昭和館を見学すると 7 階と 6 階では戦中の国民の暮らしと戦後の国民の暮らしという展示がしてあり、体験コーナーでは防空壕体験や防空頭巾をかぶったりしました。

そしてぼくはこの夏に「この世界の片隅に」という小説を読みました。読んだ理由は自分が通っている小学校にロシアからの転校生が来たことで、ロシアがウクライナに侵攻しているニュースを思い出し、改めて戦争について考えたいと思ったからです。そこでぼくは一年生のころに行った昭和館のことを思い出し、もう一度行ってみようと思いました。

小学五年生になって改めて展示を見ると、戦争によって食べ物が配給制になって、子供も、軍事工場で働くなど普通の生活が送れなくなる中で必死に苦しい生活に耐えながらそれでも空襲などで死んでしまう人々の様子を見て、涙がこみ上げてきました。

だから防空壕体験は一年生の時よりずっと戦争の恐ろしさが感じられました。そして、初めて挑戦した井戸の水くみ体験では、一日使うための水をくむのがどんなに大変だったかということを知りました。当時は多くの成人男性が出征していたので、ぼくのような小学生が水くみをしたり、家族のために働いていたと知り、今の暮らしがどんなに幸せかと思いました。同時に家の事を父や母がやってくれていることが当たり前だと思っていた自分がはずかしくなりました。そして家族みんなでご飯を食べられることがすごく幸せなことだと分かりました。

そして、戦後、家や家族、友人を失い、食料も少ない中で、必死に働いて世界有数の国を築いた日本人はすごいと思いました。

昭和館を見学して改めて気付いたことは、ぼくには戦争を止める力は無いけど、戦争を伝えること、忘れないことが、小学生のぼくにもできる平和につながる道だということです。

だからぼくは、これからも戦争を忘れないために昭和館を訪れ、昭和館を多くの人に教えてあげたいと思います。それがぼくにもできる平和につながる道と信じて。

## 審査員からのコメント

### 【岸本葉子さん・エッセイスト】

食べ物の配給制、子供の軍需工場での労働、防空壕や水汲みなど、当時の「暮らし」に多くを学んでいます。戦後の労苦の理解もあります。導入はやや長いですが、自分自身の動機や目的意識を持って昭和館を再訪していること、再訪により学びを深めていることが表現されています。結びでは、自分にできることの発見にたどり着いています。

### 【関沢まゆみさん・国立歴史民俗博物館教授】

田中さんはロシアからの転校生がきたことをきっかけに、戦争を知りたいという問題意識から昭和館を再訪しています。自分ごととして戦時中の生活を知ろうとし、防空壕体験、水汲み体験をしています。防空襲で亡くなった人への思いも書いています。戦争に巻き込まれて多くの犠牲者がでてしまうことに気づいています。そのうえで、小学生の自分ができることは、過去の戦争を忘れないこと、伝えていくことであるという重要な点に気づいているところがよかったです。

### 【伍藤忠春・昭和館館長】

幅広い好奇心から小学校1年生及び5年生の二回にわたって昭和館を訪問し、その時の感じ方の違いや、平和や家族の有り難さなどを感受性豊かに叙述するとともに、小学生の自らができることは何かを正面から問う内容となっています。